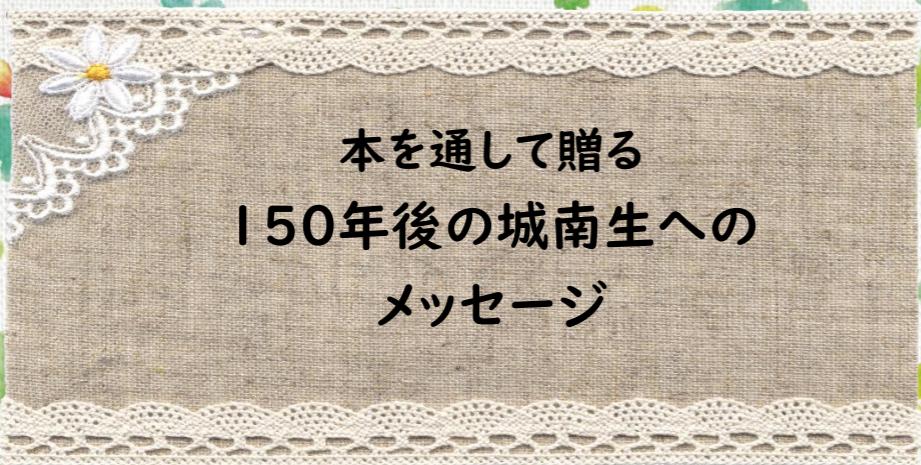


徳島県立城南高等学校図書館

2025年11月

本を通して贈る
150年後の城南生への
メッセージ



『クラクラ日記』
坂口 三千代 筑摩書房刊(ちくま文庫)



この本は坂口三千代、という女性が彼女の夫と過ごした日々をつづったエッセイです。そして彼女の夫は「墮落論」で知られる作家、坂口安吾です。安吾は湧き上がる感情を思うがままに作品と他者にぶつけ、過激な行動に出ます。そしてその矛先は時に三千代にも向けられます。彼女は悩み、傷つき、苦しんだでしょう。しかし、それでも彼女は夫が死ぬまで彼のそばにいました。

人を愛するって何だろう、と考えさせられる作品です。 (卒業生 Shihōさん)

『かがみの孤城』
辻村 深月 ポプラ社刊



今とは違う悩みも沢山あるだろうけど
頑張って欲しい。

(1年生 青さん)

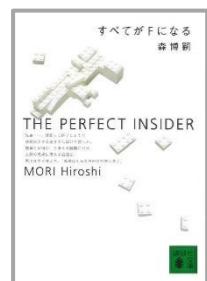
『沈まぬ太陽』
山崎 豊子 新潮社刊



社会との関わりを大切に

(教職員)

『すべてがFになる』
森 博嗣 講談社刊(講談社文庫)



「仮想現実は、いずれただの現実になります」という台詞が印象的な小説です。

作中で描かれているVRに注目して読んでみて下さい。
この小説が刊行された1996年には大衆化されていなかったものです。
新しい技術に対する人々の戸惑いを堪能して下さい。

(教職員 かんおけさん)

『正欲』
朝井 リョウ 新潮社刊



ある事件をきっかけに様々なバックグラウンドを持つ人々の人生が重なり始める物語です。
私たちは本当に「多様性」を尊重できているのか
考えてみてください。

(2年生 りあんさん)

『白鳥とコウモリ』 東野 圭吾 幻冬舎刊



150年後、令和やその前の時代にどんな風物や日常生活があったか読むと興味わくかな。
事件を追うストーリーや登場人物の心の動きにページを繰る手が止まりません。読後、罪と刑に関する問題を考えさせられます。

(教職員 I.T.さん)

『君の臍臓をたべたい』 住野 よる 双葉社刊



本は自己形成を行うためにはピッタリなものです。
時間がある時に本を開いてみませんか?
未来に繋がるきっかけが見つかるかもしれません!

(2年生 N.H.さん)

『センス・オブ・ワンダー』 レイチェル・カーソン作 上遠 恵子訳 森本 二太郎写真 新潮社刊



2025年現在と同じように、150年後の地球も未知なるものであふれているでしょう。自然の美しさへの驚き、自然の力への畏れ、「センス・オブ・ワンダー」を失うことなく生きてください。

(教職員 librarianさん)

『はてしない物語』

ミヒヤエル・エンデ作 上田 真而子・佐藤 真理子訳 岩波書店刊



「モモ」もよい。時間泥棒・虚無の概念が後からわかつてくる。

(教職員 センターリバーさん)

本を読んでその世界に没入した経験はありますか?

『はてしない物語』は、主人公バスチアンが読んでいる本の世界に入り込み、物語の登場人物と共に冒險をくり広げるファンタジーです。ストーリーを通して、「本を読む」というのはどういうことかを体感させてくれます。
特に岩波書店の布貼りハードカバー版で読むことをおすすめします!

(2025年現在、城南高校図書館で所蔵しています。)

物語を救うことができるのは誰かー。

(教職員 librarianさん)

『サード・キッチン』

白尾 悠 河出書房新社刊(河出文庫)



人種、ジェンダー、生まれ育った環境など、人はそれぞれが様々な背景、思想を持って生きています。時にはそれを理解し合えなかったり、反発を覚えたりすることもあります。

主人公の尚美は、留学先のアメリカで、日本人に貼られたレッテルや言葉の壁に疎外感を感じています。そんな時、学生が運営する食堂「サード・キッチン」のメンバーとなり、そこでマイノリティーの学生たちと出会い、心に安らぎを感じると共に自らの中にある他者への差別感情にも気づいていきます。

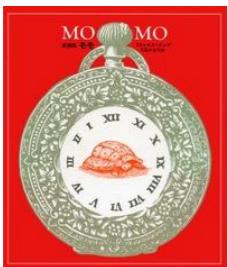
正解のない問題、個人では解決できない大きな問題に直面したとき、目をそらさずに一人一人が向き合っていくためのヒントを与えてくれる物語です。

(教職員 librarianさん)

150年後
の
未来は…



『モモ 愛蔵版』
ミヒヤエル・エンデ作 大島かおり訳 岩波書店刊



「最近、時間に追われているなあ」と感じるとき、毎回思い出すのがこの本。
主人公の少女モモが、盗まれた人々の時間を灰色の男たちから取り戻す物語です。
150年後の技術は、今では考えられないような便利な世界を生み出しているでしょう。
その世界で人々はゆったりとした時間を過ごすことができているでしょうか？
それとも生み出された時間の中で、さらに時間に追われているのでしょうか？
150年後も読み継がれていてほしい作品です。

(教職員 librarianさん)

『ドラえもん』
藤子・F・不二雄 小学館刊



ドラえもんで描かれる未来は実現できていますか？

(3年生 K.Rさん)

『俺たちバブル入行組』
池井戸 潤 文藝春秋刊(文春文庫)



金融系の小説で一番面白いと思います。
150年後の銀行はどのようにになっているか、
比較しながら読んでみてください
(3年生 ラーメンさん)

150年後まで 輝き続ける名作

『走れメロス』

太宰 治 新潮社刊(新潮文庫)



何年後でも色褪せない名作です！

ぜひ一読してください！

(卒業生 セリヌンティウスさん)

『天衣無縫』

織田 作之助 KADOKAWA刊(角川文庫)

©朝霧カフカ・春河35/KADOKAWA/文豪ストレイドッグス製作委員会



文豪の作品は難しい、と感じる人はいると思います。ですが「オダサク」の呼び名で親しまれた、織田作之助の作品は現代の作家の作品にとても似ています。文章が読みやすく、ストーリーの展開も面白いです。何よりセリフやが関西弁で語り口調も軽妙であるため、ストーリーに親しみが湧きやすいです！名作揃いの最高の短編集をお楽しみください。

(卒業生 Shihoさん)

『オリエント急行殺人事件』

アガサ・クリスティ作 田内志文訳 KADOKAWA刊(角川文庫)



この物語の結末がマジで衝撃すぎてやばいから見て欲しい

(1年生 U.K.さん)

『雪割草』

横溝 正史 KADOKAWA刊(角川文庫)

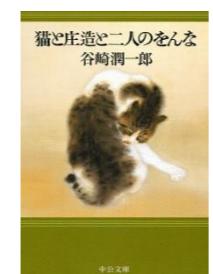


横溝正史という作家を知っていますか？「犬神家の一族」や「ハツ墓村」など、少し奇妙で独特な世界観のミステリー作品を数多く執筆した人物です。しかし、今回おすすめするこの作品は、家族小説です。あたたかみがあり、ヒロインが人生を歩く様子を、まるでテレビドラマを見ているかのように、やさしい筆致と展開で楽しむことができます。戦前の頃書かれた作品ですが、とても読みやすく、私たちの感性に響くものがあると思います。

(卒業生 Shihoさん)

『猫と庄造と二人のをんな』

谷崎 潤一郎 中央公論新社刊(中公文庫)



猫は可愛い、これは世界共通の事実です。今を生きる私たちは日々、猫に癒しをもらっています。しかし、それはどうやら昔の人々も同じであるようで…。

猫への溢れんばかりの愛を中心に繰り広げられる、人々のドタバタコメディ。

自身も大の猫好きであった谷崎潤一郎の傑作の一つです。

(卒業生 Shihoさん)

150年後まで
推します！

『さよならドビュッシー』
中山 七里 宝島社刊(宝島社文庫)



想像できないような展開が沢山あるのでぜひ読んでみてね
(1年生 N.K.さん)

『アリス殺し』

小林 泰三 東京創元社刊(創元推理文庫)



悪夢×メルヘン×ミステリ

怒涛のどんでん返し!!
(2年生 A.Aさん)

「墓参り」「黒い雪」

(『ETUDE 76』『ETUDE 77』所収)

矢和田 悠月 城南高校文化メディア表現部刊



昔の城南生にこんな人がいたことを知ってほしいです。
(2年生 ころQさん)

皆さんの先輩が書いた作品を読んでください。
文字の情景描写がすごいです。
(2年生 シャケさん)

『夜は短し歩けよ乙女』

森見 登美彦 KADOKAWA刊



2025年でもあまり見かけない表現や語句などが使われていますが、調べながら読むことも意味を想像し読み進めてあとで調べるのも、面白いです。
また、著者である森見登美彦さんの作品は軽快かつ、独特的な文面が多いため、中々読みごたえがあると思います。
是非一度、手に取ってみてください。

(1年生 かまくらさん)

『鬼滅の刃』

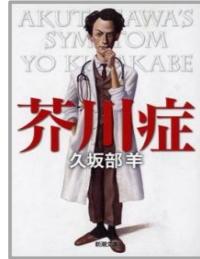
吾峠 呼世晴 集英社刊



ほんとに読んで欲しい!!
(3年生 キキさん)

『芥川症』

久坂部 羊 新潮社刊(新潮文庫)



芥川龍之介の有名な作品をオマージュし、現代の医療現場の世界に置き換えた作品の短編集です。久坂部羊さんは芥川龍之介の世界観を踏襲しつつ、新たなストーリーを編み出しています。「羅生門」、「鼻」、「蜘蛛の糸」など、誰しもが一度は読み、聞いたことのある作品たちは命や生死の現場で何を伝えてくれるのでしょう。

(卒業生 Shihōさん)

『成瀬は天下を取りにいく』

宮島 未奈 新潮社刊



この本は主人公を色々な視点で語っていて、色々な事を気付かされる小説です

(1年生 U.K.さん)

『小説 君の名は。』

新海 誠 KADOKAWA刊(角川文庫)



300周年おめでとう!

(1年生 二次関数サークルさん)

『名探偵の生まれる夜 大正謎百景』

青柳 碧人 KADOKAWA刊



この本は複数のストーリーに成り立っています。そして一つ一つに皆さんも知る、あの有名人たちが登場します。「偉人×探偵」という異色の組み合わせですが、ストーリーの展開に矛盾はなく、最後にはあっと驚くラストも備わっています。もしかしたらこんな話が本当にあった…かも?

(卒業生 Shihōさん)

『文豪失格』

千船 翔子 AIR AGENCY・フロンティアワークス原作
実業之日本社刊



現代まで読み継がれる名作を残した文豪は数多く存在しています。しかし彼らもまた人間。あんなエピソードやこんなエピソードなど、これまで彼らに抱いていたイメージが大きく覆るような話がたくさん。笑いあり感動あり驚きありの史実ネタ満載のストーリーをお楽しみください。

(卒業生 Shihōさん)

『超訳マンガ×オチがすごい文豪ミステリー』

朝霧 カフカ編 石川 オレオ漫画 KADOKAWA刊



日本のミステリー作家といえば誰を思い浮かべますか？江戸川乱歩や横溝正史が代表的かもしれません。しかし、実際には彼ら以外の作家もミステリー作品を多数執筆しています。あの太宰治や谷崎潤一郎も…。これを読むと作家それぞれの人柄が滲み出た様々なストーリーを楽しむことができますが、読み終わったあとも彼らの他のミステリー作品も探してみたくなるかもしれません。

ミステリーといっても一つの展開のみではなく、作家によって異なる世界観が広がっているのです…！

(卒業生 Shiroさん)

『方舟』

夕木 春央 講談社刊



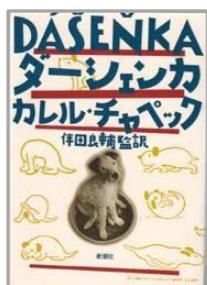
本格ミステリ好き必見です！

150年後でも色褪せない名作だと思うのでぜひ読んでみてください！

(2年生 Aさん)

『ダーシェンカ』

カレル・チャペック作 伴田 良輔監訳 新潮社刊



今夏、我が家にAIペットがやってきました。もふもふで、ぽかぽかで、かわいい声で応えてくれる、なんとも愛おしい存在。

おすすめする『ダーシェンカ』という本は、チェコの作家、カレル・チャペックが愛犬ダーシェンカに聞かせるために書いた小さなお話で、本の始めから終わりまで、ページの端から端まで、彼の子犬への愛情であふれています。

この気持ちは、150年後の城南生にも共感してもらえるはず！

ちなみに、チャペックは戯曲『R·U·R』で「ロボット」という言葉を生み出したことでも知られています。

(教職員 librarianさん)

『ちびまる子ちゃん』

さくら ももこ 集英社刊



作者のさくらももこさんが子どもの頃に経験したことを基に描いた漫画です。

私がこの漫画に出会ったのは、主人公のまるちゃんと同じ小学校3年生のとき。作者より世代は下ですが、私にとっての原風景のような作品です。昭和、平成、令和と、子どもにも大人にも親しまれ続けてきました。150年後の城南生が読んだら、昔の小学生、昔の家族の日常がのぞき見てきて面白いと思います。さくらももこさんはエッセイもたくさん書いているので、そちらもおすすめです。

(教職員 librarianさん)